

# 知行院便り

発行／宗教法人知行院 東京都世田谷区喜多見 5-19-2 TEL 03-3417-3456 FAX 03-3417-3000



元三慈恵大師一千一百年遠忌に本山より知行院に請來された大師像（三十三体中の一体）

新年を寿ぐご挨拶から始めなければならないところですが、未だ過ぎ去らぬコロナ禍に、新たな年を祝うことさえ憚つてしまふ、何とも残念なお正月になつてしましました。

新型ウイルスの感染拡大により、私たちの生活は一変してしまいました。知行院でも法要参列の皆さんとの誦経を黙読に変え、除夜の鐘は非参加で時間を変更しての実施となりました。また、秋彼岸会に一週間お預かりする予定であつた「不滅の法灯」でしたが、全国行脚が中止となつてしまつたことは残念でなりません。

「不滅の法灯」とは、伝教大師最澄様が修行をされた折、ご自身でお彫みになつた薬師如来像の宝前に灯されたものです。延暦寺の総本堂正面に、お大師様の御教えの象徴として一千二百年消える事なく現在も輝き続けています。本年六月四日に大遠忌を迎えるお大師様の御徳と御教えを改めて現代社会に広くお伝えするため、全国を行脚する予定でした。

大師のお言葉に「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」とあります。この未曾有の感染禍の中で私たちが一番に思い起こし努めなければならない言葉ではないでしょうか。

コロナ禍による危機的状況が連日ニュースとなり、警鐘が鳴らされているにも関わらず、感染は止まりません。私たちはついつい自分が気を付けていれば良いと、いわゆる「他人事」になつてしまつてはいないでしょうか？自分の事より先ず他の人を思いやる慈悲心こそ感染防止に繋がっていくと信じたいのです。

「不滅の法灯」も油が断へてしまえば、消えてしまいますが。このコロナ禍においても私たちは、他の人への思いやり、慈悲の心を絶やしてはならなりません。ひとつひとつと思いやりは、感染を抑え、社会の荒廃を防いでいきます。これからも油断する事なく、慈悲心を以て目に見えぬウイルスに立ち向かつてまいりましょう。

二十九

知行院住職  
坂本觀泰

**聞き手** 現在私たちも、元三大師の時代と同じように、コロナ禍にあり、日々、疫病を怖れる生活をしています。仏教的には、コロナとどう対峙していけばいいでしょうか？

**住職** 前号で観音経のことを話題にしました。そして、観音様の「観」には、真観（ものを正しく見る力）、清淨觀（何事にも執着しない）、広大智惠觀（広い深い洞察力）、悲觀（人の悲しみをわかる力）、慈觀（人のために施すことのできる力）という五つの意味が込められています。

まさに今、この観音さまの徳を見直すべき時に来ているのだと思います。

コロナに関する情報は、とても錯綜しています。いろんなことが言われていますが、どのが正しいのか、よくわからない状況になっています。

だからこそ、真観、ものを正しく見る力や、広大智恵觀、広い深い洞察力を育んでいく必要があります。いろんなものに踊らされないように、何事にも執着しない清淨觀も必要でしょう。みんなが不安になつてゐる中、人の悲しみをわかる悲觀、人のために施すことのできる慈觀も大切にしなければなりません。我々が観音さまの徳を身につけていくことが、まさに現代のこの状況に求められているのではないか？（終わり）

世寿八十歳 法臘六十一年  
心よりご冥福をお祈りいたします。

地にお生まれになりました。幼名は有弘、一くんちゃん」の愛称で「存じの方も多いかと思います。  
昭和三十四年七月 目黒不動瀧泉寺 青木道晃  
師ご戒師の元 得度受戒 同年比叡山行院にて二ヶ月の修行 僧侶としての資格を取得されました。  
大学卒業後は一般企業に奉職する傍ら、觀雄大僧正のお弟子として知行院の法務のお手伝いをされてこられました。  
定年退職後は自宅にて氣功施術院を開設 週末は調布深大寺院内職員として法務や御詠歌の指導にと精力的に活動をされてこられました。  
二年前より体調を崩し 入院加療に努めておられましたが 薬石の効なく去る二月十二日に角逝 黄泉に趣かれました。

いたたきまじた。  
親類縁者知人等で、興味のある方がおられましたら、ご連絡いただければと思います。



も三十三の姿があり、その三十三の大師の姿をお札にした、豆大師のお札というものもあります。

当山法嗣坂本亮晃師が病氣療養中のところ令  
祐元年二月十二日遷化されました。師は昭和十五  
年九月先々代 観雄大僧正の二男として喜多見の

知行院墓地で、新たに小規模区画を整備しました。

角大師のお札  
(深大寺)

**聞き手** 今年はコロナ禍で、いつもとは違う大変な一年となりました。

**住職** 疫病というものは、昔から怖れられていました。昔はウイルスというものは、知られていませんでしたので、神仏の力で何とか疫病を退散させようとしたのです。

天台宗でも、疫病と向き合ってきた歴史があります。特に疫病退散で有名なのが角大師です。天台宗では、この角大師のお札を配つてあるお寺が少なくありません。

東京の深川にある深川江戸資料館に行くと、江戸時代の庶民の生活を再現したジオラマがあります。人々が暮らしていた家も再現されていますが、その戸口に角大師のお札が貼つてあります。

江戸時代には、この角大師のお札がたいへん流行ったのです。家の戸口に貼つて、疫病が入つてこないようにしていました。そして、「あなたも疫病にかかるなければならない」と言うのです。それに

**聞き手** 角大師というのは、どんな仏さまなの

ですか？

**住職** 仏さまではなく、千百年くらい前に活躍したお坊さんです。

天台宗では延暦寺の住職のことを座主と呼びます。平安時代末期の十八代目座主に良源といいう方がいらっしゃいます。慈恵大師が正式の諡ですが、延喜十二年（九一二）の元月三日に亡くなつたので、元三大師と呼ばれるようになりました。

元三大師は、延暦寺中興の祖でもあります。

伝教大師最澄が比叡山を開かれて百年以上がたいたといわれた時代です。中には貴族社会と馴れあって、乱れた生活をする僧侶も多かつたそうですね。

そんな時代に活躍された元三大師は、僧侶の振る舞いを正し、綱紀肅正をされました。

大会・広学堅義といいう、法華經の真理を究めているかを問う堅義（試験）を始められ、荒廃しつつあつた比叡山を再興されました。

元三大師が座主であつた頃、世間に疫病が蔓延しました。そんな時、元三大師のもとにも、疫病神が現れます。そして、「あなたも疫病にか

豆大師のお札  
(目黒不動龍泉寺)

## 教えて、住職さん！

### 第八回 疫病と角大師

対して元三大師は「この指にうつしなさい」と言つて、指を差し出したと言います。

靈驗あらたかな大師でも、疫病にかかり、高熱を出します。そして「この病はほんとうに苦しい。疫病に苦しむ人を救わなければならぬ」と発心して、觀念三昧に入り、祈祷を始められたのです。

大師は、祈祷を続けるにつれ、段々とやせ細り、鬼のような姿になつていったと言います。障子に浮かびあがつた修行する様子を弟子が紙に写したり、木版を彫り、刷つたのが角大師のお札なのです。

大師は、そのままお加持して、家の戸口に貼るよう言います。そしてお札を貼つた家では疫病にかかることはなく、病に伏せつていた人も全快したと伝えられています。

コロナ感染がまだ収まる気配がありませんが、細心の注意と感染予防策を講じて、知行院法類寺院様、総代様、親族若干名にお集まり頂き、細やかですが三十三回忌法要を営み、大僧正のご遺徳を偲びたいと思います。



世話人総代、親族とのスナップ

昭和12年1月24日  
晋山式記念写真（知行院本堂前）  
法類寺院近隣他宗派寺院、弟子仲間、  
世話人総代、親族に囲まれて

## 観雄大僧正を偲んで 三十三回忌法要

知行院第廿六世住職（先々代）坂本觀雄大僧正「最勝音院大僧正觀雄大和尚」の三十三回忌を来る二月十三日、天台宗教区宗務所長宝塔寺住職林觀照様にお導師をお勤め頂き

厳修いたします。觀雄大僧正は、明治四十三年十月九日、福井県鯖江市生まれ。

大正十二年、十四歳で母方の大叔父にあたる目黒不動龍泉寺住職加藤觀澄僧正に師事し、小僧生活をスタート。昭和七年縁あつて知行院第廿五世坂本智本師の元に転師、昭和十一年に知行院第廿六世の法灯を繼承されました。

觀雄大僧正は、明治四十三年十月九日、福井県鯖江市生まれ。大正十二年、十四歳で母方の大叔父にあたる目黒不動龍泉寺住職加藤觀澄僧正に師事し、小僧生活をスタート。昭和七年縁あつて知行院第廿五世坂本智本師の元に転師、昭和十一年に知行院第廿六世の法灯を繼承されました。

住職となつてお亡くなりになるまでの五十有余年の間、山門の補修、墓地の拡張、書院・鐘楼の建築等、寺門隆昌・法灯護持につとめ、書道会、詠讚会、写経会、坐禅会、華道教室、少年野球等の諸事業を通じて人材の育成にも尽力されました。

また、住職を務める傍ら、都立園芸高校砧分校に奉職、地域の勤労青少年の教育にも情熱を傾けられました。

地域での活躍もめざましく、喜多見東部町会を設立し、自ら町会長として陣頭指揮をとり砧中学校校道の設営を始め、相模水道問題、バスの乗り入れ誘致、次太夫堀公園設立等に献身、地域住民の福利に多くの功績を遺されました。

天台宗では、東京教区主事二期宗議会議員二期八年務め宗政に功劳を遺され、昭和五十年大僧正の職位に昇られ、昭和六十年には住職五十周年表彰を受けられました。

コロナ感染がまだ収まる気配がありませんが、細心の注意と感染予防策を講じて、知行院法類寺院様、総代様、親族若干名にお集まり頂き、細やかですが三十三回忌法要を営み、大僧正のご遺徳を偲びたいと思います。